

レクチャー 古文編

次の文章を読んで後の問に答えよ。

其中^{その}やさしく哀^{あは}なり^し事^は薩摩守忠度^は当世随分の好士^も也^也。其^{その}比^{ころ}皇太后大夫^は A

卿^を奉^たて、千載集撰^はる事^有き。既に^{既に}行幸の御共^に打出^られたり^{ける}が、乗替一騎

計^{だけ}具^{ばかり}て四塚^{より}帰^りて、彼^の A 卿の五条京極の宿所の前^にひかへて門たたかせ

ほ、内より「何なる人ぞ」と問ふ。「薩摩守忠度」と名乗^りければ、「さては落人にこそ」と

聞^きて、世のつゝまじさに返事^もせられず、門もあけざりければ、其^{その}時、忠度「別事^{にて}

は候^はす。此^{この}程百首^をして候^を見参^に入れずして、外土^の龍出^む事の口惜^さに持^て参^りて候^はす。

何かは苦しく候^へき。立^たながら見参^し候^はや」と云^いければ、A 「あはれとおほして

わな々々々々出合^給へり。世^しづまり候^なま、定^て勅撰^の功^終候^はむすらむ。身^{こそ} A

ある有様にまかり成候ども、なからむあとまでも、此道に名をかけむ事、生前之面目たる

〔へし〕。集撰集の中に此巻物の内にさるるへき句候はず、思食出して一首 入られ候なむや。

供養の依頼

且は又念仏をも御訪候〔へし〕とて、鎧の引合より百首の巻物を取出して門より内へ投入て、

「忠度、今は西海の浪に沈むども、此世に思置事候はず。さつは入せ給へ」とて涙をのい

いて帰にけり。 A 卿感涙を押しへて内へ帰入て、燈の本にて彼巻物を見られければ、

秀歌共の中に「古京の花」の云題を、

大津京

〔さ〕なみや 志賀の都は あれにしを 昔ながらの 山ざくらかな

細波

「忍恋」の

いかにせむ みやきが原に 摘む芹の ねのみなけども 知る人のなき

音 泣け

其後いくほどもなくして世しづまりにけり。彼の集を奏せられけるに、念度、此道にす

幾程

静まり

きて道ちかよりま歸かへたりしこ志こころ浅あはからず。但し、勅ちく勘くわんの人の名なをい入いる事こと、はまかりある事ことなれは。 c

①で、この二首を B

②と入いれられける。さこそかはり行く世よにてあらめ、殿上だんじやう d

人なむどの読よまれたる歌を B

と被ひ入いけるこそ口惜くちやくけれ。

(『平家物語』)

20

問一 空欄Aに入る適当な人物を次のうちから一つ選べ。

- 1 経信
- 2 俊頼
- 3 匡房
- 4 俊成
- 5 定家



問二 傍線a「かゝる有様」とは「都落ち」のことを指す。本文中ではこのことは何と表現されているか。抜き出せ。



レクチャー3 古文・漢文融合編

次の文章は『建礼門院右京大夫集』の一節である。みなもとのみらむね源通宗が、建礼門院右京大夫に女房への取り次ぎを依頼したところから話が始まる。これを読んで後の問に答えよ。

〈通宗の宰相中将の、常に参りて、女官など尋ぬるも、遙かに、来えしもふと参らず。常に

「女房に見参せまほしき、会はいかがす来べき」と言はれしかば、この御簾の前来に、うちしは

ぶかせたまはずか聞き付けむずるよし申せ後「まことしからず」と言はるれず「ただ

ここもとに立ち去ら後で、夜昼候ふぞ」と言ひてのち、「露もまだ 甲ぬほどに参りて、

立たれにけり」と聞け命召次命「らづくも追ひ付け」とて、走らかず。

荻の葉断にあらぬ身なれ打音もせ打見る打も見ぬ打と思ふ打なる打べし

久我命いかれにけるを、Bやがて尋ねて、文はさしおきて命帰りけるに、C侍命追は

せけれど、D「あなかしこ、返し取るな」と教へたれば、命倉羽殿の南の門まで追ひけれど

むばら、からたちにかかりて、藪に逃げて、力車のありけるにまぎれぬ。と言へば、
 茨 枳 穀

「よし」にてありのち、「さる文見ず」あらがひ、また「参りたりしかど」、
 後 争ひ

御簾の内はしるかりしかば、立ちにき、
 2 1
 また「はたらかで見しかど」、あまり

物騒がしくこそたちたまひにしか、
 と言ひ合ひ
 五節のほどにもなりぬ。その
 程

のちも、
 3
 このことをのみ言ひ争ふ人々あるに、
 4
 豊の明りの節会の夜、
 5
 冴えかへりたる

有明に、
 参られたりしけしき優なりしを、
 程無く
 ほどなく
 はかなくなれにしかはれさ、あへ

なくて、
 その夜の有明、雲のけしきまで、
 形見なるよし、人々常に申し出づるに、

〈思ひ出づる心もげにぞつきはつるなごりとどむる有明の月
 名残り〉

問一 空欄甲に、動詞「干る」を適切な形に活用させて入れよ。解答は、ひらがなで記せ。

